すみよし

２０１８　クリスマス号　第２０６号

聖　句

主の天使が夢に現れて言った。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。

マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。

この子は自分の民を罪から救うからである。」

ヨセフは眠りから覚めると･･･　妻を迎え入れ、

男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。

そして、その子をイエスと名付けた。

マタイによる福音

1 章 20-21 節,24-25 節

選：パウラ・テレジア

C.K.

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪　神さまがここにいる　≫

エマニュエル・ポポン神父

　天使が羊飼いたちに声をかけた時に、羊飼いたちは用意していなかったので驚いたでしょう。彼らは特別な修行や、霊的生活を送っていなかったと思います。天使の報告は彼らの日常生活に響きました。それで突然、神が身近な存在になりました。
何の準備もできていなかったので、当たり前に怖がってしまいました。どうして怖がっていましたか？神が感じられたからだと思います。神の偉大な存在感に包まれました。そして新しい世界が見えてきました。神がいます。この世にいます。見えないが、その力を感知した、と思うようになりました。これから神と共に、神のうちに生きて行く。
　イエスの誕生は神の働きのしるしとなります。自分の心配に閉じ込もってしまうとその働きを意識できないままで済んでしまいます。それで幸福を逃してしまいます。
イエスの誕生を通して、神様が生活の相手として現れました。神様は空気のようなものです。すべては神のうちに命を受けます。
私もこれから自分のことについて悩む前に、まず神様のうちに生きているということを思い起こしていきたいです。
　イエスに会った人はみんな拝むようになりました。彼らの中で神様の声が強く響いたからだと思います。イエスを囲んで、神様がここにいると実感したからです。
羊飼いたちと博士たちが残したあかしを受けて、信仰生活を続けて行きたいです。
どんなことがあっても、神様がここに、今います。神様のうちに生きています。
もう悩まなくてもいい、神様のうちにすべてが新しくなります。
主の道を整えることはそこから始まると思います。
神様に属しています、神様のうちに生きるのです。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

目　次

☆	聖句		・・・	1
☆	巻頭言	エマニュエル神父	・・・	2
☆	目次		・・・	3
☆	酒井俊宏補佐司教　司牧訪問		・・・	4
☆	傘木神父様を偲んで	H.T.	・・・	5-9
☆	ペンケレシ神父様 叙階７０周年	M.N.	・・・	10
☆	ふっこうのかけ橋プロジェクト		・・・	11
☆	バーベキュー大会		・・・	12
☆	恵老のお祝い		・・・	13
☆	セニョール･デ･ロス･ミラグロス		・・・	14
☆	追悼祈念ミサ		・・・	15
☆	住吉フィエスタ		・・・	16-17
☆	七五三		・・・	18-19
☆	シリロ神父様訪問記 PART２		・・・	20-21
☆	図書紹介		・・・	22
☆	（教会日誌・信徒動静）		・・・	23
☆	後記		・・・	24

題字　J.Y.

「すみよし電子版」はカトリック住吉教会 HP にフルカラーで掲載されています。
左記 QR コードからのアクセスもご利用下さい。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪　酒井補佐司教司牧訪問　≫

12 月 9 日(日)

待降節第二主日に酒井俊弘補佐司教が住吉教会を司牧訪問されました。司教となられてからは初めて、そして待降節のタイミングでのご訪問に信徒たちの喜びもひとしおでした。
待降節は「待つ」こと。旧約の民が待ち続けた救い主、日本では潜伏キリシタンたちが堂々と信仰を証しすることができる日を２５０年も待ち続けたことなどを例に、私たちは次の世代に神様のこと、信仰を伝えるため、一人ひとりができることを成し遂げることができますよう祈りましょう、とお話なさいました。ミサ後はお当番の皆さんが心を込めてご準備くださった温かい豚汁とおにぎりをいただきながら歓談、身も心も温まった一日でした。

司教様の祝福をいただいて

にこやかに歓談される司教様

おかわりもたくさんどうぞ

おいしかったですね

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪ 傘 木 神 父 様 を 偲 んで ≫

ルカ　H.T.

アウグスチヌス傘木澄男神父

傘木神父様は2018年8月8日88歳で帰天された。
私は神父様の旅立ちに医師として関わり、間近に接し立派な最期のお姿を拝見し、強く心を打たれ沢山のことを教わった。
神父様がお説教や信仰講座、それに普段のお話の中で語られたことをいつも思い巡らしている。

神父様は2014年4月神戸東ブロックに赴任してこられ、5月16日健康管理と治療を希望され、初めて来院された。普段からご自分でも健康には随分気をつけておられ、昨年の夏までこれといったお体の変化もなくお元気にされていた。

しかし2017年8月31日、突然体調を崩され、その夜一睡も出来なかったと、翌朝連絡されて来られたので、直ぐ病院に紹介した。
検査の結果、大きなご病気が見つかり、担当医から治療の説明などを受けられたが、神父様は「私は神様のもとに早く行きたい」と言われ積極的な治療を受けることを拒まれた。
神父様は、既に覚悟されていたようで、前田万葉大司教様（当時）に会って「自分の現在の病状などを報告しておきたい」と言われ、主治医としての意見書を求められ、10月に大司教様の所に持って行かれた。

神父様の容態はしばらく落ち着いておられたが、11月末再びお体の具合が悪くなられ病院に行っていただき、担当医から直ぐ処置を受けるように勧められたが、神父様はその処置を受けることも、断られて帰って来られた。急ぎ神父様のもとに行き、これは症状を改善させる方法で手術などではないことを説明し、やっと納得していただき処置を受けられた。その後まもなく症状は改善され、しばらくして普段の生活に戻られた。そのご様子を側で見ていて、ミサの中でのお説教や信仰講座での「御言葉を聴き、神様を信じる事の大切さ」を話される神父様のお言葉には、今まで以上に大きな響きが伝わってくるように思われた。そして無事に年を越され、神父様方には大変多忙な四旬節も、ご復活祭もお元気に勤め上げられた。

しかし、病魔は静かに神父様のお体を蝕み続け、6月初め頃から体調不良をきたされ、立っておられるのも難しくなってこられた。神父様に「無理されないように」とお伝えしたが、「ミサを捧げることは私の使命ですから」と体調のお悪い中でも普段どおりミサを捧げられた。
6月10日神戸地区大会の会場で前田万葉大司教様にお会いし、神父様のことを報告した。大司教様は随分心配され、側におられた神父様方にいろいろ指示され、教区が関係している緩和ケア病棟などのお話も聞かせていただいた。

7月に入ってから神父様の容態はますます悪くなり、歩行も困難となられたが、それでも毎朝コンスルタ神父様とエマニュエル神父様に抱えられて神戸中央教会の小聖堂でミサを捧げられていた。しかし、7月28日早朝司祭館で倒れられ入院された。その時も神父様は「救急車は呼ばないで」と言われたため、お二人の神父様が大変苦労され司祭館の２階から抱えられてコンスルタ神父様の車で病院まで運ばれたとのことだった。

入院された病院でのベッド安静は相当にお辛かったようで８月１日夜、病室から「どうか直ぐ、ガラシア病院の緩和病棟に行けるよう手配して下さい」と電話してこられた。そのお声はいつもとは全く違った、切羽詰ったものだった。急ぎ、病院に出向き 夜も遅かったが、病棟の看護師さん達に無理を言い転院の手配をお願いし、ガラシア病院の方にも神父様の意向をお伝えした。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

そして翌８月２日 神父様を介護タクシーでガラシア病院までお連れした。神父様は、終始目を閉じられ、ただ一言“水をください”と云われたきりで、お問いかけしても首を振られるだけで、病院まで口を一文字に閉じられ、強い苦痛を我慢されているご様子だった。

昼過ぎにガラシア病院の緩和病棟に入られ、そこで看護師さん方の温かな対応、そして 松本信愛神父様のお声掛けとお祈りに、神父様はとてもお喜びになられ、それまでの表情とはうって変わり、満面の笑みを浮かべられ「こんな静かでカトリック的な祈りの環境の所に入れていただき、ありがたい、ありがたい」と何度も感謝され、「これで神様のもとに行けます」と私の手を強く握り締められた。８月５日、前田大司教様、アベイヤ司教様、酒井司教様のお見舞い訪問を受けられた際には、ベッドにきっちり座られ、感謝を述べられ、神父様の思いなどを述べられたと、後に大司教様からお伺いした。そしてその夜から深い眠りにつかれ ８月８日静かに神様の御もとに旅立たれた。

短い時であったが、神父様の直ぐ側に共に居させていただき、お話を聞き、その毅然としたお姿を拝見していて、神父様のそばにはいつも主が寄り添い、しっかりと神父様を支えておられるとはっきりと気づかされた。そして、私は神父様からまことの信仰心を教わり、聖霊の息吹に満たされているような気持ちになった。

神父様　私が至らなかったために苦しい思いをなさった事、お許し下さい。
どうぞ、神様の御もとで永遠の安息の時をお過ごし下さい。　　神に感謝

追記：　傘木神父様のＣＤ-Ｒによるお説教集の編集について

住吉教会では神父様方のミサや黙想会あるいは信仰講座などでのお話を、Ｋさんが毎回ＣＤ-Ｒに保存して下さっております。神父様のお説教などについて、いろいろな方に伺ったところ、もう一度神父様のお話を聞きたいという、ご意見を沢山いただきました。神父様は、活字にしたお説教集の作成には、あまり快く思っておられませんでしたので、広報委員の方とわれわれ有志で相談し、誰でも直ぐ聞けるように、2014 年 4 月から 2018 年 7 月までの傘木神父様のお説教のＣＤ-Ｒを、教会の年間暦ごとに編集し直し、新しいＣＤ-Ｒ集を作るようにしていただきました。　今回、CD-R 集作成に先立ち「すみよし」クリスマス号発行に傘木神父様の 2015 年クリスマス日中のミサのお説教を掲載させていただくことになりました。

皆様が聖書を開き、神父さまのお説教を聴き直し、そしてイエス様が何を私達に語りかけておられるのかを、黙想する機会になれば幸いです。

ルカ　　H.T.

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

2015年12月25日　主の降誕　日中ミサのお説教より

みなさん、御降誕おめでとうございます。

夜半のミサが行われた昨晩に続いて今日も世界中、至るところでクリスマスを祝われていることでしょう。でも、この瞬間にも世界は自然災害や戦乱の被災地、難民キャンプ等で数知れない人々が想像を絶する苦難に喘いでいます。その人たちにとってクリスマスとは何なのでしょうか。平和な家庭や教会で祝える私達だけではなく、希望と喜びのいくらかでもあるところならすべてのクリスマスの場面となります。クリスマスは救いの喜びと平和の祭りであるから、いざこざのない平和な状態で祝うのが相応しいと私達は思っているのかもしれません。でも問題がなくて平和ならクリスマスも祝えるが、もめ事や悩み事がある場合にはクリスマスなど祝えないし、その気にもなれないと言うならばそれは間違いでしょう。救い主キリストは不安と動乱に満ちた時と場所でお生まれになりました。平穏で幸せな境遇でクリスマスが祝えるならそれはよいことですが、不幸ならばその不幸な現実こそクリスマスの、すなわち救い主が来られることの意義をいっそう重いものとするのではないでしょうか。救い主キリストは人間の苦しみとみじめさの中にこそおられるのではないでしょうか。神は人間と一つになって、人間の幸福と不幸の双方に深く入られました。ですから御降誕はどんな状況にも希望と喜びをもたらすのです。辛い時も、否、そのような時こそ御降誕を祝うのにふさわしい時なのです。抑圧された国の、虐げられた民のためにお生まれになった救い主キリストが今もそのような境遇の人々のために生きる希望と力をお与えくださるように、私たちはまずその人たちのために祈りたいと思います。

クリスマスは救い主の誕生日ではなく、御言葉の受肉の日々を祝うものです。それが12月25日になっておりますのは、もともと当時に太陽の誕生を祝う異教の祭りであったものを教会が借りて、真の太陽、キリストの誕生を祝う日に変えたものであると言われます。異教の文化に対する教会のこのような柔軟な態度は、世界にあるものはすべて神のお造りになったもので、みな元々良いものだという確信から来ています。神が人となられたことも、罪に穢れた人間の本性を配慮しないでそのままご自分にお取りになって自ら人間となり、その本性を用いて人類の救いを成し遂げられたということです。それにしても私たちキリスト者は現代のクリスマスはもう商業主義の餌食となり、すっかり世俗化されてしまったと嘆いているのですが、昔は反対に教会が異教の祭りを一挙にキリスト教化したという事があったわけです。そう思いますと、今日のクリスマスの世俗化にも何かの御摂理が潜んでいるのかもしれません。クリスマスは誰の心にもほのぼのとした郷愁を憶えさせ、希望を呼び覚ましますが、それはクリスマスが嬰児の誕生という出来事であるからでしょう。
年の暮れ、生活に疲れ、現実の乏しさに失望している私達は、嬰児の無防備で穢れの無い姿とそれを取り巻く人々の善意の温かさの中にもう一度未来への希望と人間に対する信頼を取り戻せるように思うのです。

同時に、クリスマスはその親しみ深さの陰に計り知れない神秘を抱えています。この嬰児は実は神である救い主なのです。昔と違って今は幼子はただただ愛らしく甘美なものとみられております。それが今日のクリスマスの祝い方にも影響を与えているのでしょうか。幼子イエズスを人となって私達の内に住みたもうた御言葉としてよりも、産着に包まれて飼葉桶に眠る無垢な嬰児として見てしまうのです。でも、そのイエズスは今も復活の主イエズスとして私達の内にお住まいになるのです。幼子イエズスを見つめる時、私達はそこに万物の主、救い主キリストをも同時

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

に認めなければなりません。郷愁の想いに惹かれてクリスマスのこのよりよい重要な神秘の側面を、即ち神は私達を救うために御自ら人となられ、人間の本性をもって贖いの業を成し遂げられたというこの事実を見落としてはならないのです。

今日のヨハネによる福音は、飼葉桶の幼子が神の御言葉であり、神御自身が人となられたお方であることを疑いの余地もなく証しています。初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉は肉となって私たちの内に宿られた。幼子は受肉した神の御言葉です。御言葉は神の御心、神ご自身の現れです。イエズスさまはその御言葉が神のお心とご計画を啓示し、神の愛を形あるもの、見えるものとして示すために自ら人となられたのだから、神ご自身です。人間の体を帯びた神のお心そのものです。それにしても限りなく尊く偉大な神様がなぜ人間にお生まれになったのでしょうか。それは聖書が告げるとおり、神はその御一人子をお与えになるほどに世を愛されたからだと言うほかはありません。神の深遠な心とご計画は人間には推し量ることは到底できませんが、私達は神が人となられたというこのクリスマスの出来事の前で、神の愛は何とものすごいことなのか、そのお心となされ方は人間の心や仕方と何と違うことかと強く感じます。それを知って、感動して、喜んで、そして回心していく、それがクリスマスの一番大切なことなのです。

お告げの時、神は天使を遣わして神の母となることを受け入れてくれますか、と乙女マリアの意思をお尋ねになります。人類の運命がかかるこの重大なときに、神は一人の人間の、しかも一少女の意思を尋ねてその同意を求められるのです。神はそれほどに人間を大切になさいます。飼葉桶の嬰児がこの神の愛の最大の証です。世界の救い主であるお方がそのようなひどい境遇にお生まれになりました。これが神様のなさり方です。胎内に宿って生れる、という人間の存在と命のその発端にまで身を沈めて、あらゆる人と一つになるために人間界のどん底まで身を低められたのです。飼葉桶の幼子を見ると、もはや誰も神の限りない、徹底的な愛を疑うことはできないでしょう。頼りないホームレスの子供となられた神、嬰児、イエズスさまのお姿。もしも神様が神様のままでいて、私達と同じ姿になられなかったとしたら、そう想像してみましょう。クリスマスのない世界、飼葉桶の嬰児が与えられなかった世界、それはどんな所となっていたのであろうか、とそう思いますとクリスマスがどんなにすごい、ありがたい、素晴らしいことであったかがわかるでしょう。

このイエズス様が後に公生活に入られると、まず下積みの人々を友とし、その中から弟子たちをお選びになりました。それは弱いものを通してご自分の力を現すためでした。それが人間とは違う神様のなさり方です。そこには価値の逆転が起こっています。翻って、幼子のようにならなければ神の国には入れないとイエズス様は言われます。イエズス様は文字通り、その幼子と並んで幼子の目で私達一人ひとりをみておられます。そしてこの幼子はやがて成人して、抑圧された人々の仲間となり、病人に手を置いて治し、飢えた人々に食べ物を与え、罪びとの友となり、ついには十字架の上で命を捧げていかれます。そのすべてがクリスマスの物語です。ですから、クリスマスを楽しいお祭りとして終わらせてしまってはならないのです。

ルカ福音書は、マリアは起こったことを悉く心に留めて思い巡らせていたと記しています。マリアにも身に起こったすべてのことは、ひとつひとつ何を意味し、どこへ導いていくのか見当もつかないことでした。救いの日には日常生活も身近な現実の中で展開していきます。思い巡ら

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

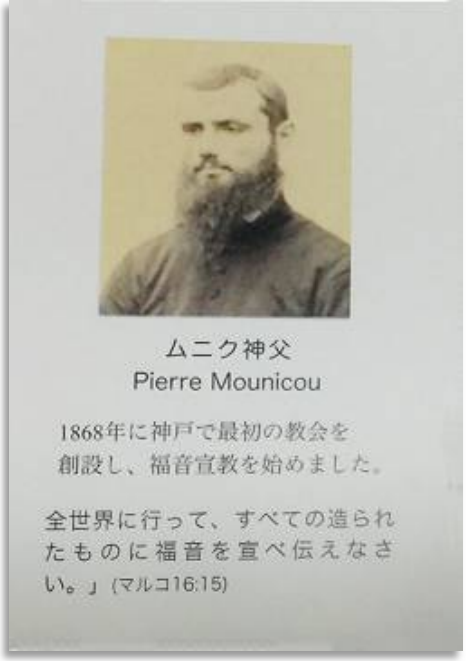
し、考え続けるマリア。その一生も手探りで進み、徐々に深まっていく信仰の旅路でした。私達もマリア様と一緒にこの同じ信仰の旅路を一歩一歩歩んでいきたいと思います。

こうしてクリスマスの舞台はベトレヘムの馬小屋から大きく広がっていき、その呼び声が飼葉桶を越えて遠く響き渡っていきます。人となられた神が幼子としてではなく、永遠に生きて支配される復活の宝、キリストとして絶え間なく伝聞されます。私達は「インマヌエル」、私達と共におられる神となられたイエズス様と結ばれて、これからも日々クリスマスを心に、すなわち愛されていることを確信するものの喜びと平安の心で、そして特に弱い立場の人々を愛されるイエズス様の心で生きていきたいと思います。こうして救い主キリストの御降誕が私達の中で確かな恵みの出来事となっていきますように、お導きを、お助けを祈りましょう。

傘木神父様、私たちをお導き下さりありがとうございました。
神様の御許に旅立たれた神父様のお言葉を胸に私達がこれからも歩んでいくことができますよう、どうぞ見守ってください。　（編集部）

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪ペンケレシ神父様　叙階 70 周年≫



10 月 8 日、神戸中央教会で、ムニクウ神父様を偲ぶ記念ミサ及びペンケレシ神父様の叙階 70 周年のお祝いが行われました。

ペンケレシ神父様のお年は存じ上げていましたが、いつ神父様になられたかについては、今まで考えたことがありませんでした。改めて考えると、70 周年ってすごいことです。そして、神父様に叙階されてから、どれぐらいで日本に来られたか伺いましたら、1949 年のクリスマスとのことでした。神父様になられて一年余りで日本に来られたのです。1949 年、昭和 24 年と言えばまだ日本が戦後の大変な時期でした。ムニクウ神父様が、150 年前に神戸にまかれた信仰の種を育てるために、その大変な時代からずうっと私たちのために働いてきてくださったこと、本当に、本当にありがとうございます。

どうぞ、これからもお元気で私たちを　お導きくださいませ。

M.N.

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《ふっこうのかけ橋プロジェクト》

８月２日(木)～６日(月)（六甲自然の家 CAMP は３日～５日）

７年目となるふっこうのかけ橋プロジェクト。今年も多くの方々のお祈り、募金、支援に支えられ、無事に実施できました。お忙しい中ご参加くださった神父様方、ボランティアの六甲学院生、住吉と神戸中央教会のリーダー達、食事・宿泊のお世話を下さった方々、全ての皆様に心から感謝！

福島から小学生１５名、中学生２名、小さなお子さん３名と付き添いのお母さん５名が来てくださいました。姫路城を見学、姫路教会を訪問後はたかとり教会に宿泊。

CAMP ではエマニュエル神父様のミサで１日がスタート✝　アスレチックや体育館で遊んだ後は、皆でバーベキュー♪
午後はカヌーやアーチェリー、ザリガニ釣りなどを楽しみ、夜はキャンプファイヤー☆

５日は六甲自然の家からロープウェイとケーブルカーで下山🚃
神戸中央教会でお昼ご飯を食べ、閉会式。２泊３日の CAMP も無事終わりました。その後、福島のお友達は北野工房で“吹き流し作り体験”をして、宿泊地の住吉教会でバイキング形式の夕食を食べました♪

最終日は住吉教会で大久保神父様による閉会式の後、ポートタワーを見学。飛行機と新幹線で帰路につきました。恵み豊かな時間を皆で過ごせて楽しかったね。また会おうね！

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪　バーベキュー大会　≫

8 月 26 日(日)

夏休み最後の日曜日の夕方から、恒例の住吉バーベキュー大会が催されました。
午後の早い時間からみなさんが準備設営にご協力下さり、コーナン神父、コンスルタ神父、東ブロック教会の皆様、そして今年は教会学校の子供たちとお母様方も参加して下さいました。おいしいお肉や野菜をほおばりながら歓談、あっという間に時間は過ぎて行きました。
子供たちにとっても楽しい夏休みの思い出のひとつになったこの時を与えてくださった神様に感謝の夕べでした。

コーナン神父様のお祈りで開会

焼き方さん、子供たちは大活躍でした！！

お話もはずみます

子供たちはみんな仲良し
花火もきれいだったね

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《恵老のお祝い》

9 月 16 日（日）

9 月 17 日の敬老の祝日を前にして、住吉教会では 16 日の主日のミサの中で恵老の祝福と祈りが捧げられました。
平和で豊かな日本の社会を築き、教会のために力を尽くされてきた人生の先輩方に感謝します。
神様の豊かなお恵みがますます注がれますように・・。
ミサ後、クッキーとお茶でお祝い会をし、皆で楽しく歓談いたしました。

《結び目を解く聖母マリアへの祈り》

助けを求める子どもたちを見捨てられない母マリア、
限りなく愛する子どもたちの願いを聞いてくださる方。
神の愛と憐れみに満ちたまなざしを向けてくださる方。
わたしの人生に絡み合った結び目をご覧ください。
あなたはわたしの苦しみと失望を知っておられます。
この結び目がわたしを締め付けています。
悪魔さえも、憐れみ深いあなたの御助けのもとからわたしを取り去ることはできません。あなたのみ手で解けない結び目はありません。
おとめマリアよ、
恵みと力をもって、あなたの子、救い主イエスのもとに
この結び目を受け入れてください。
神の栄光のために、あなたにお願いいたします。
この結び目を解いてください。
あなたは御父がわたしに与えてくださった唯一の慰め、わたしが弱っているときの砦、
貧しいときに豊かさを与えてくださる方。
キリストといることを妨げるすべてのものから解放し、わたしの願いを聞き入れてください。
わたしを守り、導き、よりどころとなってください。
結び目を解いてくださる方マリア、わたしたちのためにお祈りください。アーメン。

＊1986 年にベルゴリオ司祭（現・フランスコ教皇）が、ドイツでこの絵を見て心を打たれ、母国アルゼンチンに広く伝え、この「結び目を解く聖母マリア」へ祈ることを勧めてきました。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪　セニョール・デ・ロス・ミラグロス　≫

10 月 28 日(日)

ペルーの信徒の皆さんが毎年心待ちにされているセニョール・デ・ロス・ミラグロスが今年も住吉教会に多くの方が集まられてお祝いされました。ラモス神父、エマニュエル神父とペンケレシ神父の司式による、スペイン語と日本語のバイリンガルミサに引き続き、恒例のお神輿の聖行列、その後の民族楽器演奏や舞踊をペルー料理に舌鼓を打ちながら楽しみ、近隣だけではなく遠方からも来られて久しぶりの再会を喜ぶ皆さん、遠くの故国を想う懐かしい一日を過ごされたことでしょう。

3 人の神父様の司式によるバイリンガルミサ

御像とともに退堂

聖行列は教会と幼稚園の敷地内を途中で男性から女性などと担ぎ手を替えながらゆっくりと進みます

美しい民族衣装でペルー民族舞踊マリネラ

ペルー民族楽器ケーナ、サンポーニャの美しい調べ

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《追悼祈念ミサ》

11 月 4 日(日)

死者の日（11 月 2 日）後の主日である 11 月 4 日、エマニュエル神父司式で「住吉教会ゆかりの死者のための追悼祈念ミサ」が捧げられました。共同祈願の中でこの 1 年に亡くなられた方々の名前が読み上げられ、故人を偲び祈りを捧げました。

エマニュエル神父は、説教の中で 4 日の朗読福音書の「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し 、また隣人を自分のように愛する」という箇所を引き、「神を愛する」とは、どうすれば いいのか・・・、それは「聞く」ということが重要になってくる・・自分の心の中の神の 声を聞くこと、心の中の愛の息吹に耳を傾けること、そしてその声に従うことが大切、と 話されました。

慈しみ深い神よ、あなたはひとり子の死と復活によって、人類に希望を与えてくださいました。キリストを信じてこの世を去った兄弟姉妹に永遠の安らぎを与え、あなたの光の中で憩わせてください。私たちの主イエス・キリストによってアーメン。

ミサの後は、クッキーとお茶で語らいのひとときをもちました。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《フィエスタ（バザー)》

11 月 13 日（日）

M. S.

当日は天候にも恵まれ、和やかに１日を過ごすことができました。品物の寄贈や、調理、販売、またそれに伴うご準備など、皆さまのご協力のおかげと感謝しております。
訪れた方からも、楽しかった、また来年も来たいなどのお声を聞き、うれしく思っております。
何よりも、住吉教会の温かな雰囲気の中でバザーをできたことが本当に良かったです。
この場所で続けて行くことが大切だと思いますので、また来年も楽しみにしています。

ホットドッグ担当の青年学生チーム
トッピングはお好みでどうぞ

輝く笑顔のおもてなしで、ちらし寿司完売 ☺✌

ドリンクコーナーは我らにお任せあれ

プロも顔負け！人気の手作りケーキ

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

恒例のインド雑貨コーナー

本格的なペルー料理
ターキーサンドとチキンライス

フワフワの綿菓子はいかが♪

福島の復興支援コーナー

小学生は輪投げに夢中

名司会のリードで盛り上がるビンゴゲーム

来年も一人でも多くの皆さんと共に
楽しいひと時を過ごせますように♪

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《七五三のお祝い》

11 月 18 日（日）

11 月 18 日の主日のミサの中で、三人のお子さんたちが七五三の祝福をエマニュエル神父からいただきました。

7 歳、5 歳、3 歳の三人は緊張しながら、おメダイをかけてもらいました。

皆で、小さい方たちの豊かな未来をお祈りいたしました。

アグネス　　S.M.さん　7 歳

H.K.さん　　5 歳

マリア・クララ　A.Y.さん　　3 歳

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

保護者の祈り

　すべての父である神さま、この子供たちを授けてくださったことを心から感謝いたします。 この子供たちが、強く正しく生きるために、必要なお恵みをいつもお与えください。また、親としての尊い務めを、ふさわしく果たすことができますように、光と力を与えてください。 主イエス・キリストによって、アーメン。

子供の祈り

　かみさま、わたしたちは　おとうさん、おかあさんのおかげで、七五三のおいわいをすることができました。ありがとうございます。これからもげんきなよいこになって、かみさまをよろこばせることができますように、おまもりください。イエスさまによって。アーメン。

千歳飴を手にご挨拶。
大きな拍手につつまれました。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪シリロ神父様訪問記　PART２≫

昨年の本誌クリスマス号では、故郷のスペイン　アソース村に戻られたシリロ神父様（住吉在任 2004 年～2012 年）のご活躍を、M.T.さん（今春兵庫教会へ転出）がレポートして下さいました。昨年の文中、シリロ神父様が T さんのお嬢さんにかけられた言葉「Y チャンはどうして祝福だけなの？聖書をたくさん読んで、また来年いらっしゃい。私が洗礼を授けてあげるよ。これからずっと祈っているよ。」をご記憶の方も多いと思います。Y.T.さんは帰国後、シリロ神父様のお計らいにより東京のイグナチオ教会で要理を学ばれ、今年 9 月 30 日、アソース村の教会で受洗なさいました。住吉に端を発する絆が、海を越えて実を結ぶ嬉しさはひとしおです。当日の様子が現地の新聞に大きく掲載されましたのでご覧下さい。

（以下 10 月 1 日付 Diario de Navarra 紙より抜粋）

20,000KM PARA BAUTIZARSE EN AZOZ
アソース村で受洗　-2 万キロをこえて-

「嘘のようですが、今日は皆さんと『日本語』で歌をうたいます。」とミサのはじめにシリロ・オラデレ神父はおっしゃいました。冗談みたいでしょう。しかし、ミサの終わりには、アソース村の聖堂に集まった 40 人の隣人がまるで日本語をよく知っていたかの如く「聖霊来てください」をうたい、Y.T.さんの洗礼の感動を分かち合いました。

彼女は 49 歳の日本人。東京で画廊を経営し国際的なアートフェアで活躍しています。そして洗礼の秘跡を受けるため、このエスカバルテへやってきました。彼女がお母様と一緒にシリロ神父を彼の故郷へ訪ねたのが 1 年前。その時に取り交わした約束を果たすため、2 万キロをこえる道程でした。

「50 年前にアソースは、私を宣教師として送り出しました。今日、私たちは彼女をクリスチャン、神の娘、そして宣教師として送り出すのです。」この村の出身で 40 年以上にわたり日本で活躍したシリロ神父は、Y さん（霊名テレジア）に声をかけました。当日はシリロ神父とイズコ神父が司式を行いました。

（※イズコ神父も長年大阪教区でお働きになり本年６月スペインへ帰国なさいました）

アソース出身のシリロ神父は、神戸で Y.T.さんのお母様と知り合いました。「お母様は私の教会の信徒でしたが、娘の Y さんは洗礼を授けられておらず、昨年アソースを訪れるまでは信仰を意識していない様子でした。しかし彼女は洗礼を受けるために、はるばる戻ってきたのです。」とシリロ神父は語りました。

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

Diario de Navarra Lunes, 1 de octubre de 2018 NAVARRA 23

Yuki Terashima, 49 años, directora de un museo y sala de exposiciones en Tokio, fue bautizada ayer en Azoz por el sacerdote Cirilo Orradre, natural de este concejo de Ezcabarte. Se conocieron en Kobe, donde fue misionero 42 años.

20.000 Km para bautizarse en Azoz

PILAR FDEZ. LARREA
Azoz

AUNQUE os parezca mentira, todos vamos a cantar hoy en japonés", avanzó el sacerdote Cirilo Orradre al inicio de la eucaristía. Sonó a broma. Pero al acabar la ceremonia, era como si los 40 vecinos reunidos en la coqueta iglesia de Azoz se hubieran familiarizado con el idioma, tras entonar *Seirei Kite Kudasai*, acunados en la emoción de compartir el bautizo de Yuki Terashima. Japonesa, 49 años, vive en Tokio, donde dirige un museo y sala de exposiciones, y se desplazó a este concejo de Ezcabarte para recibir el sacramento del Bautismo. 20.000 kilómetros envueltos en una promesa que se hizo a sí misma hace un año, cuando visitó en este pueblo a Orradre, misionero que conoció años atrás en Kobe.

"Hace 50 años Azoz me envió a mí como misionero a Japón, hoy la enviamos nosotros a ella, como cristiana, hija de Dios y misionera", dijo de Yuki, desde ayer también Teresa, Cirilo Orradre, natural del pueblo y cuatro décadas destinado en el país del sol naciente. José Antonio Izco, otro sacerdote navarro con más de 40 años de andadura en Japón, concelebró la eucaristía y dijo la homilía en japonés. "A mí ya se me ha olvidado bastante", se disculpó Orradre.

En Kobe, el misionero de Azoz conoció a la madre de Yuki Terashima. "Era parroquiana mía. Cristiana, pero no bautizó a su hija y Yuki no era religiosa, hasta que hace un año sintió algo en Azoz. Quiso volver para bautizarse", relató la curiosa historia Orradre. Terashima llegó a Navarra el viernes por la tarde, con su madre; su madrina, Keiko, y otra amiga. Hoy mismo regresan a su país, tras una escala de dos días en Madrid.

Emocionaron las lágrimas de Yuki casi en toda la ceremonia y tanto o más el respeto con el que los vecinos de Azoz participaron de la eucaristía. Cómo la arroparon en el que, confesó Yuki, fue el día más grande de su vida.

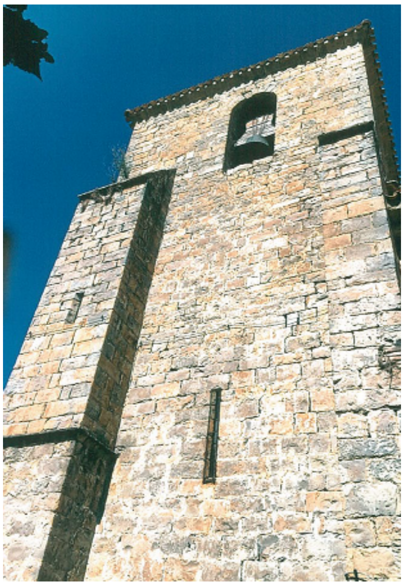
No faltó detalle en la misa, en la que también ayudó Masahiro Yuki, japonés seminarista en Navarra. Iker Ibarrola Paternáin y Kira Tainta Arrarás fueron monaguillos, en un día en que bandearon las dos campanas del pueblo, algo que solo sucede en días de excepción.

Las cuatro mujeres japonesas ocuparon uno de los primeros bancos en la iglesia, donde todo estaba dispuesto con mimo. Hasta las flores recogidas a buen seguro en las huertas, al cobijo del monte Ezkaba.

Yuki no domina el español, pero al terminar la ceremonia logró leer un texto con el que quiso agradecer, primero a su madre, y a su madrina. Recordó a su padre, fallecido hace 30 años, y contó su viaje del año pasado para visitar al Cirilo. "Aunque vivo muy lejos, estoy feliz, muchísimas gracias", peleó de nuevo con sus lágrimas, tras el Ave María que su madre interpretó con una ocarina.

Yuki Terashima atiende al sacerdote Cirilo Orradre, en un momento de la ceremonia, ayer en Azoz.

Yuki y su madrina, Keiko, se dirigen a la pila bautismal.



洗礼式の間、Y さんの眼からは感動の涙があふれ、ミサに集まった多くのアソース村の人々は彼女の姿を見て心を動かされました。「今日は人生最良の日でした。」とミサの後、Y さんは語りました。

洗礼式がスムーズに執り行われるよう、日本人の神学生　幸 真広（ユキ・マサヒロ）も手伝いました。侍者の Iker Ibarrola Paternain と Kira Tainta Arraras は特別の日だけに鳴らす鐘を高らかにうちならしました。4 名の日本女性のために教会のベンチ最前列に席が用意され、近くのエスカバ山で咲く特別の花々が入念に集められ、聖堂を飾りました。

Y さんはスペイン語に不慣れですが、洗礼式の最後には用意してきた文で、先ず彼女のお母様、次に代母の K.K. さんへ感謝の言葉を述べました。また 30 年前に亡くなったお父様を思い出し、1 年前にシリロ神父を当地に訪ねた時の話もされました。お母様がオカリナでアヴェ・マリアを演奏なさった後、Y さんは「私は遠くに住んでいますけれども、今日は心から嬉しく思います。皆様、有難うございました。」と涙で声をつまらせました。

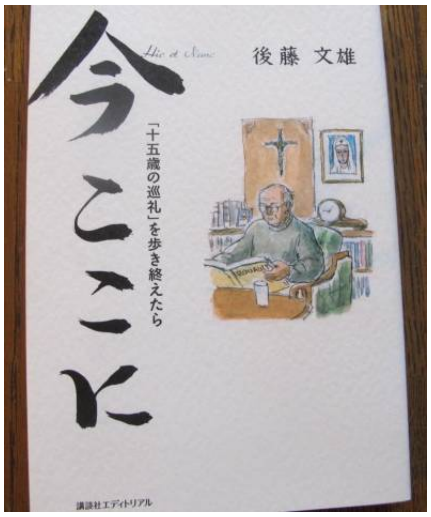
Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪図書紹介≫

『今ここに「十五歳の巡礼」を歩き終えたら』

著者　後藤文雄

講談社エディトリアル



著者はカトリック神言修道会神父。
1929 年新潟県長岡市生まれ。
小学校の代用教員を務めた後 1950 年神言神学院に入学。
1960 年司祭叙階。
カトリック吉祥寺教会、南山教会、恵方町教会主任司祭を
歴任する傍ら、カンボジア難民の子ども 14 人を里子として育てる。またカンボジアで建設した学校は 2016 年までに 19 校を数える。（本の紹介から抜粋）

はしがきにこう書かれています。
「当時十五歳だった一九四五年八月、故郷の新潟県長岡で、空襲により母と妹、二人の弟、叔母の五人を失った朝に始まった、人生という名の巡礼の旅もようやく終わりに近づいてきました・・・・・」

お寺に生まれ僧侶の父上との確執、受洗そして司祭への道に進まれたために勘当されたが父上は叙階式に出席され、神学校時代には勘当も解けたらしいというほっとする記述もある。また恵まれない人、可哀想と思う人がいると、ついつい同情の思いが湧いてきて何かしないではいられない気持ちになるのは、きっと母の影響なのだろうと 45 歳で亡くなられた母上が困っている方達をよく助けていられたことを思い出されているところもあり胸をうたれます。
「私のイエス、私のマリア」という章もあり、ご両親のこと、教会のこと、神父様方との交わり、カンボジアの人々と共に過ごされた歩み等々ご紹介しきれない多岐な内容です。
また内容によく合った挿画がたくさんあり、理解を深めてくれます。

（編集部）

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪編　集　後　記≫

近年、私のまわりでとても親しくして頂いた大切な方々が相次いで天の国へ召されたり、又一人暮らしが難しくなって施設へ入られたとの報告を受けたりと心寂しく気持ちの整理がつかなくなるような出来事が増えて参りました。

私達は何事もすべて神様のご計画に従って歩んでいるのだと考える時、心から神様を信頼し、み旨のままにと祈るばかりです。

M.M.

子供の頃はクリスマスが近づくと心が弾んでクリスマス・ツリーとその下に並べられたプレゼントを見ながら心待ちにしていた記憶があります。歳を重ねた今では「クリスマスはただ祝って喜ぶだけではなく、じっくりと自分を見つめ直す時期でもある」というチャーチルの言葉が心に響きます。今年も各地の台風と地震で災害にあわれた方、病に苦しむ方、大切な方を亡くされた方等とさまざまな立場でクリスマスを迎える人々がいます。住吉教会では私達を温かく信仰に導いて下さった傘木神父様が旅立たれました。主の降誕の喜びと共にしっかりと見つめなおし自分の立場で何が出来るか考え、深い愛情と思いやりを持って人々に接する事が出来ますように。

Christmas is a season not only of rejoicing, but of reflection

Winston Churchill

A.M.

教会案内

ミサ

主日ミサ	日曜日	9:30
	第１・第３土曜日 スペイン語	19:00
週日ミサ	火・金曜日	9:30

講座

信仰の分かち合い	第５日曜日	11:00
聖書の集い	金曜日	10:15
Come & See	第４土曜日	15:00
教会学校	第１・第３土曜日 対象：小学１年生～６年生	14:00-16:00
評議会	第３日曜日	11:00
野宿者支援炊出し	第１土曜日 （住吉教会集合）	9:30

「すみよし」第206号

発行日	2018年12月24日
発行責任者	エマニュエル神父 コンスルタ神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380

http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp

Copyright © 2018 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved